

手づくり文化創造発信



夢フェスタ水の里 竈神様の置き土産 ～豊里町おこし物語～

市内の歴史や逸話を題材に、市民が創り上げる登米市民劇場「夢フェスタ水の里」(登米市、登米市教育委員会、(公財)登米文化振興財団主催、夢フェスタ水の里実行委員会主管)。

19回目を迎える夢舞台は3月4、5の両日、登米祝祭劇場で開かれた。キャスト、スタッフ総勢 260人の手づくり舞台が、詰めかけた約1400人の観客を魅了した。

感動の舞台から、文化創造について考える。

■住民が地域づくりに困ったとき、歴史に名高い人物が現れ、知恵を授けてきた。しかしそれは仮の姿。住民たちを助けてきたのは、安寧を祈った竈神だった。■明治の若者は、地域づくりを進めるために何をすべきか悩んだ。■「どぶろく」で村おこしを目指した終戦直後の若者たちだが、どぶろく造りは違法行為。刑事に嗅ぎつけられるも「甘酒だ」と言い張る。地域の未来のために頑張る若者たちの姿に共感し、刑事は見逃す。■キャストのかつらを固定するメークスタッフ。■現代の子どもたちの前に現れた謎の少年。その正体は竈神だった。■クライマックスでは、市内のよさこい団体が集結し、夏の祭りを思わせる舞を披露した。■謎の少年から種明かしをされ、戸惑う児童たち。■2日間で約1400人の観客が訪れた。■合併でもめる2つの村の人々。■地域おこしに困った村人の前に、知恵を授けに現れた豊臣秀頼(左)と武田勝頼(右)

Interview



夢フェスタを鑑賞して
伊藤義巳さん 中田町白地

プロの演技と遜色ない

夢フェスタはこれまでも何回か鑑賞しています。見るたびに思うのですが、これが全て地域の人たちの手づくりというのすごいですね。脚本、大道具、演技や運営など、プロのものと同レベルなんです。本当に素晴らしい。物語から市内の歴史を勉強できるというところがいいですね。これからも、長く続いてほしいと思います。

あらすじ

豊里町は江戸初期、滅亡した武田家や豊臣家の家臣らが住み着き、登米伊達家の手で開墾が進められた。だが、北上川を西方に曲げて追川と合流させたため、洪水が再三起こるようになった。

明治期を迎えても過酷な暮らしは改まらず、人々は壁土で作った竈神を自宅の台所に掲げ、日々の安寧を祈り続けた。

そうした中、人々が困り果てると、地域にゆかりのある高貴な人物が現れ、豊かな里づくりの知恵を示唆する現象がしばしば起きた。人々はその暗示をヒントに、防災対策や産業、文化イベントの構築に取り組み、豊里独自の風土をつくり上げてきた。

「夢フェスタ水の里」は、市内の各町に残る題材に新解釈を加えた創作劇で、地域文化の再発見を目的に1999年から公演がスタートした。本年度は、豊里町のこれまでの歩みを題材に選び、町民有志や演劇経験者、登米文化振興財団の職員が協力して脚本を書いた。